

形態性論 (フォン、エーレンフェルス)

岩井勝二郎

の立論の方針については、フォン、エーレンフェルス (von Ehrenfels) に俟つて置るべきが多い。

心理學上の形態説 (Gestalt-theorie) は、デルタイ (Dilthey, W.) 一派の構造心理學 (Struktur) とも或る意味での密接なる關係を保ちながら、近時漸く學界の一勢力をなすにいたり、ひとり意識の範圍に止らず、行動の方面にも及び、更には物的現象の理解の上にも、その特別な見地を適用することに成功せむとしてゐる。

この派の代表者としては、通例、エルトハイマア (Wertheimer, M.)、ケホラア (Kochler, W.)、及びコフカ (Koffka, K.) をあげるのであるが、かれ等が標語として掲ぐる形態^{グスタルト}の概念の内容、乃至はそ

フォン、エーレンフェルス、詳しくはクリスチアン、フライヘル、フォン、エーレンフェルス (Christian Freiherr von Ehrenfels) は、一八五九年、ロオダウン (Rodam) に生れ、プラアグ (Prag) 大學に哲學を講ずること日既に久しい。布伦タノ (Brentano) やマイノング (Meinong) に學び、その影響を受けるところが多くその主著は價值論體系二卷 (System der Wertheorie) (一八九七—九八) であらう。第一卷は一般的價值論、慾望の心理學と題し、第二卷に於ては、倫理學を扱ふ。この前

後に主として倫理學や、心理學上、特に感情、意志の方面につきて、注意すべき論文がある。その形態性論^{*}は、比較的初期の作であつて、一八九〇年ウイン(Wien)時代の發表にかゝる。

説く所は、ひとり、今日の形態心理學的思想の前驅者としてのみならず、又統覺の創造的綜合作用を説くゾント等の學説を或る意味で補充し、徹底するものとしても、傾聽すべきものがある。左にその大要を紹介して、親しく原本につくを得ざる人の参考に資したいと思ふ。

* Christian Freiherr von Ehrenfels:

Über Gestaltqualitäten.

Vierteljahrsschrift für Wissen-

schaftliche Philosophie. XIV.

1890. SS. 244-292.

全篇を大別して三部とするべしである。はじ

めに、形態性の意義を明かにし、次に、その種類をのべ、その重なるものを論じ、終りに、心的生活上に於ける意義を説く。氏によれば形態性は意識内に於て、表象群の存在と共に、何等特殊の知的の活動を俟たずして直接に與へられるところの積極的なる表象内容である。この考へ方を徹底せしめることによりて、所謂、心的性質の不可還元性をも結局は簡單なる原本的性質の結合と、それに伴ふ形態性によりて説明せむとする。

二

從來、最もひろく行はれる學説が、空間形態や旋律の如き表象は、既成のものとして外から受け容れられるのではなく、個々の感覺を結合することによりて、はじめて生ずべきものであるとしたのに對して、マッハ(Mach, E.)が一八八六年の著感覺の分析論(Beträge zur Analyse der Empfind-

ingen) に於て、これ等の表象は、いづれも、直接に感覺せられ得ると主張したのは注目すべき事柄である。更にかゝる表象の由來についての問題と並んで、それ以上に大切であると思はれるのは、これに關連して起る表象の體驗についての問題である。すなはち、これ等の表象中に存するものは要素の單なる結合にすぎないのか、又は、その外にこれと並びて別に新なるものがあるのかといふことである。

マツハは、この點について明言しないやうであるが、寧ろ後説に與みすると思はしめる筋が多い。エーレンフェルスが主張せむところも亦この第二説であつて、氏の形態性論は、まづ、消極的にその存在に對する非難への反駁からはじまる。

三

一つの旋律を把捉するためには、そのときどきの音の印象を意識に保つだけは足らぬ。若し然りとすれば、同一の終末音を有する旋律の終りの印象は、皆同一であるべき筈である。かくて一つの旋律の表象が一つの表象群、從て時間上に相踵ぐ個々の表象の總和を前定することは疑ないのであるが、當面の問題は、音の場合では又次の如く考へることができやう。今、音系列 $t_1, t_2, t_3, \dots, t_n$ の経過が一つの意識 S に由りて、音形態として把捉され、——從て全ての音の記憶像が同時に存在するものとすれば——、更に又、これと並びて、 n 個の音の總和は、各音がそれぞれの時間的規定を保ちながら n 個の意識によりて、すなはち n 個の個人の各が n 個の音の一つづつを表象するやうに考へてみれば、旋律を把捉する意識 S は、他の n 個人の表象を合せたより以上のものを表象するか否か。

空間形態では、その根底をなすところの全ての部分が同時に與へられるために、關係が更に簡單にはなるが、こゝでも、部分的表象が一つの意識にまとめられる場合と、 n 個の意識にわけられる場合とを考へれば、旋律と同様にして、個々の場所的規定の總和以上であるか、換言すれば、その圖形の意識は他の n 人の全てを合せたより以上のものを表象するか否かの問題が起る。

かゝる問題に際しては、内觀を證據として用ゐることはむづかしい。たとへ、内觀によりて、その確證を把み得ても、その微細な區別を他人に傳へることはまづできかねる。加之、上に述べた新要素の生起をば、はじめから矛盾だとして拒まうとする人すらもある。

四

多數の表象又は感覺が同一意識内に集れば、それだけで、直ちに、個々のものには含まれなかつた新なるものが、その總和以上に加るといふことは、丁度、二つの原子の觸接によりて、第三の原子をつくり得ると同様の考へであるといふ非難がある。

乍併、かゝる非難は物界の法則——物質保存の法則——を誤りて心界に適用せむとするがために起る。いかにも、表象をば原子同様に考へ、全ての心的生活をば、既成の表象内容を一意識から他意識へ移すことであると看做せば、多くのかゝる要素の一意識内に於ける集合から新要素を生ずべしといふことは不可思議でもあらう。乍併元來、この物質保存の法則すら、經驗上の證明に基くもので、單なる概念上の所産ではなく、これを以て

心界に臨むことは出来ない。しかるにこの見解は又、心的過程と生理學的過程との直接的關係の假定とも調和するのであつて、次にも示すやうに、前掲二つの場合に於ては、その生理學的過程は互に相異なると思はれるのである。

一方、音形態の表象内容 $t_1, t_2, t_3, \dots, t_n$ 等の總和を持つ意識 S と、他方その一々を内容とする n 個の意識 $s_1, s_2, s_3, \dots, s_n$ の總和とを比較する。心的内容 $t_1, t_2, t_3, \dots, t_n$ に對應する生理學的過程をそれ $r_1, r_2, r_3, \dots, r_n$ と名ければ、意識 s_1 には r_1 が必要となり、 s_2 は r_2, \dots 同様に s_n は r_n を必要とし、意識 S には $r_1, r_2, r_3, \dots, r_n$ が必要となる。併し一方では此系列 r_1, r_2, \dots, r_n は n 個人の中に一つづつ、心的内容 t_1, t_2, \dots, t_n を生じ、他方では一個人中に生ぜしめるのであるから、これに對しても何等かの生理學的の基礎を要する。假りに最も簡單なる場合をとりて、これ等の

生理學的過程が一定の空間的限界内に集まれば一意識内に心的内容 t_1, t_2, \dots, t_n を生ずるけれども、それ等の空間上の距離が此限界を踰れば、多數の個人の中に起るとする。こゝに既に兩者の間には生理學的基礎の相違がある。今六個の運動が一立方糎内に行はれる場合と、その各が一米づつ離れて行はれる場合とは異なる。生理學的過程の密集が六個の心的個體間の隔壁を撤して、その代りに一つの包含的なものを立し得るとすればそこで例へば旋律の如き新なる心的要素を生ぜしむべき條件がなりたつ。素より何人も、心的個體の隔壁が實際上、かくも粗笨なる條件によりて與へられるとは主張しまいが、當面の研究には、これ等の具體的な假定は何であらうと關係はない。とにかく、多數の表象に對する生理學的條件の中で表象が全て同一の意識中に起るに必要なものは、又、表象群の上に新要素を加ふるための條件をな

すのである。

かくて第一の非難は、物理學的の見解を誤りて心界に移したものであつて、心的表象の最も太しき唯物論的なる理解に對してすらも當蔽まらぬものである。

五

同一意識内に二つの表象内容がある毎に、つねに、第三の、これとは別の内容が生れるとすれば私共の表象生活は無限の複雑を來すにいたるであらうといふのが第二の非難である。併し、嚴密にいへば、これは當面の問題に對する非難ではない。形態性が何等主觀の補助なくして、その根底をなす表象群の存在と同時に與へられるといふことを前定すればとて、區別され得る表象要素は、全て、形態性の基礎をなすとはいはぬ。況や形態性そのものごとの要素との集合が更に新性質を作

るなごゝは、決して主張はせぬ。この點を別としても、なほこの非難は不當である。すなはち、同一の論法を用ゐれば、實際吾人の持つ表象例へば一般に空間的の連續についての表象の可能性の如き亦拒むべきことゝなる。

かくて、氏の形態性論は、一方では物質保存の法則に基く非難、他方では概念上の矛盾に基く攻撃を退けて、積極的の部分に入る。

六

形態性の存在は、尠くとも視、聽の兩範圍に於ては疑ふことができぬ。旋律や、圖形では、音や場所の上の基礎が全然相異なるときにも、類同がある。かくてはこれ等の諸形態をこれ等の要素の單なる總和と同一視することはできぬ。

若しそれをしも、總和に過ぎずとすれば、これ等の要素の群は、その要素が類似するに従て益々類似する筈であらう。併し、これは旋律や空間形態の場合には當て嵌まらぬ。

同一の旋律をハ調で奏するときと、嬰へ調で奏するときとは、場合によりては全然共通の音を持たぬこともあるが、些少なりとも音楽を解し得るものには、その類同は何等の反省もなく、直ちに、知られる。又等しく同一のハ調で、しかも全然同一の要素を用ゐながら、その序次を異にするときには、いかに一々の音を比べ合ひ、數へてもリズムの同一なることの外は、何人もこれが類同を感せぬであらう。於是か、もはや旋律は、それが基く個々の音の總和にあらざること疑はれぬ。

同様のことは又空間形態に於ても存するので、

一般にこれ等の形態は、要素の總和以上のものがある。

この點については、別に記憶の方面からも證明せられる。概して、旋律を記憶し得る人も、旋律の助けなしには、一々の音程を記憶しがたく、更に個々の音の絶對の高さにいたりては、一層再生に困難を感ずる。かくの如きは、旋律や一々の音程を個々の音表象の總和にすぎずと解しては到底説明し得ぬ現象である。總和を一時に再生する方が、その成分を別々にするより容易であることを認めても、由是、説明せられるところは、旋律が一々の音程に比して好都合であることにすぎない。未だ以てこの両者が一々の音の絶對的高さに優る所以を説くことできぬ。元來、一つの旋律を原のとは別の高さで再生するときには、最初の個々の表象の總和を再生したのではなく、これとは全く異なるものを再生するので、それは前の場合と

共通なる個々の成分相互の關係についての特性である。この關係こそは、積極的なる表象要素すなはち音形態中にありて、同一の音形態は常にその個々の要素間の同一なる關係を制約することの根底をなすものでなる。

かゝる積極的なる表象要素があれば、聯合には何等の困難もない。

空間形態やその要素についても亦同様の現象がみられ、再生は、知覺に際して與へられる場所の與料には決して固執しない。

七

消極的には非難攻撃への反駁、積極的には視聽兩範圍に於ける實存の證明、かくて第三段に入りてはじめて形態性は定義せられる。すなはち

形態性 (Gestaltqualität) とは、意識中の表象群の存在に結びつく積極的なる表象内容である。

但しこの表象群は互に分つべき、從て互に他と離れて表象せられ得る要素から成り立つ。

こゝに形態性の存在に不可欠なる表象群を名けて形態性の基礎 (Grundlage) とす。

八

しかく定義せられたる形態性は、心的生活のいたるところに於てみられる。於是、分類の問題が起る。

旋律は時間的の、圖形は空間的の、共に形態性の特例ともみられるが、更に運動の如き時間、空間の兩方面に涉りて、しかも形態性の屬性を完備するものがある。從てこゝには形態性を時間的と非時間的の兩種にわかす。非時間的形態性の基礎には何等時間的の規定を要せぬ。素よりその知覺に時間を要せずか、其要素が同時に把捉せらるゝを要すとかの謂ではない。換言すれば前者は

その基礎が全て知覺表象又は感覺に與へられるものであり、後者は精々にて一つの要素が知覺表象中に與へられ、その他は憶起像又は期待像中に存するものである。

九

一般に表象群Cが意識中にありて、これと同時に存在する一表象内容Vがこれと同一であるか、將又それに基づく形態性と看做すべきものであるかを決めるためには、Cの要素をば、相互關係は、そのまゝにして、變化させるときは、Vが全然か、さなくとも殆ど不變であるのに對し、少しく、たゞ一部分だけでも、不規則的にCの要素を變化させるときには、Vは全然その特性を失ふにいたるか否かを檢する。若し、この條件に合するときにはVはCと同一ではなく、Cに關係するところの形態性である。

Vの憶起に由る再生がCの要素のそれよりも容易いことも亦、形態性の成立を指示する。

かゝる見地よりすれば、視覺の外に、觸覺亦所謂運動感覺と合して空間的なる形態性をなす。その他の感覺の空間的性質は極めて漠然として、これに由りて空間形態を定めにくいのではあるが、こゝにも尙、視、觸兩域に於けると同様の根本的なる關係はある。

音覺に於ける調和と音色とは、旋律と同じく、絶對的の高さは無關係であり、絶對的の高さを記憶し得ぬ場合にも、これを再生することが出來従て形態性をなすものであるが、これ等の場合では形態性が著しく優勢なるために、その基礎を要素に分析することは困難である。このことは音色に於て特に甚しく、屢々又協音についてもみられる。

こゝに同時に知覺せられる種々なる個々の音色の場合の如く、空間的規定を有するか否かの問題がある。この規定を有するとすれば、調和や音色の如き非時間的の音形態性と、ひとしく非時間的ながら、空間的なる形態性とはたとへ、同一なる具體的の直觀中に與へられても、なほ、互に區別せられねばならぬ。

このことに關連して注意すべき事柄が二つある。その第一は、形態性には抽象の過程が營まれ得ることであり、その第二は視覺の範圍にも、空間的以外の形態性があるにあらざるかといふ疑問である。

まづ第二の指示に従へば、視覺には、色彩調和の現象がある。これは一種の非時間的にして、且非空間的なる形態性をなす。但し具體的なる直觀

に於ては常に空間的の形態性と並存して一全體をなし、抽象に由りてはじめて兩者がわかれたる。

こゝには音の場合のやうに、相異なる要素の群から、同一なる調和的の印象を得ることはないがこれは形態性にとりて不可缺の屬性ではない。その本質とするところは、基礎には基くが、これとは區別せらるべき表象内容であるといふ點である。

視覺の場合と同じく他の感覺域に於ける空間形態亦、抽象的に得られるが、不明瞭にして嚴密なる證明は困難である。

觸、溫度、時には又味、顯の感覺が密接に融合して統一的なる總體的印象を與へることから、その基礎を多數の感覺範圍に抄りて有する形態性の成立亦可能であるかと思はれる。音と色とよりなるものは今日なほ未だ知られないが、他の範圍に

ありては壓と溫度とよりなる濕氣の表象や、壓と溫度と匂ひとよりなる食物の味の如き、その例に乏しくない。

一〇

表象内容が一定の方向に變化するときには、その變化するものが要素であつても、非時間的形態性の基礎をなす要素の群であつても、とにかく、時間的形態性をなす。たかまる、あからむ、ひゑる等の語で表はされるのは、その例であるが、共に一定の方向への變化が統一的なるものとして把握せられる。今、變化する表象内容の時間的經過を z_1, z_2, \dots, z_n であらはし、この變化が連続的であるとすれば、 z_1 と z_2 との間にある全ての状態は、相互にも、又 z_2, z_3 間の全てとも、つねに相異なるべきである。こゝに z_1 より z_2 を經て z_3 にいたる變化が統一的なる特性を保ち、一つの名稱を得

又は得べきときに、そこには一つの形態性が與へられる。

この變化が激しいために、一定方向への前進とは看做されざる場合には、形態性の存在亦怪しいのであるが、これをも尙、その不斷の交替とみることは出來やう。

時間的形態性はその種類も極めて夥しい。視覺の範圍では具體的には色彩の變化が場所や形態の變化と融合して直觀的な性質をなす。未だこれ等の諸方面に同時に適合するやうな統一的な名稱はない。色彩變化の例としては、あからむ、あをざめる、くらくなる、かゞやく、空がはれる等がある。運動の方面は更に豊富ではあるが、これを表はす語は一層乏しい。乍併、かくして語に固定せられ得るものは、無数の具體的の形で表はし得べきものからの抽象の結果にすぎないのであるか

ら、いかにこれを結合すとも、この種の直觀的な形態性の片影をだに傳へ得ぬのである。繪筆ですら、變りゆく状態の連鎖の中から、たゞその一齣を捉へ出すにすぎないのであつて、これによりては言語の缺點は、たゞ少く補はれるのみである。詩的天才が、よしや現象そのものでなくとも、その感情的効果を傳へて、その抽象的なる表示と結合して、想像中に、具體的なるものをつくり得せしめるでもなければ、例へば敘事詩の如き、大部分は讀者又は聽衆の心にこの種の形態性の表象を喚び起すことよりなる藝術は、説明することができない。

視覺は音覺に比べては、非時間の場合と同じくその種類は貧弱である。踊子の運動を再生することは困難であるが、その際の旋律は容易く記憶せられる。これは兩範圍に於ける時間的形態の記

憶に難易の相違あるによる。運動に比しては、光と色との變化に基く時間的形態性の把握はなほ困難とされてゐる。その、藝術的には從來殆ど利用されなかつたのはこれがためなのであらう。

音の時間的形態性では、空間的の方面が全く姿を潜めて、所謂、音運動も實は位置の變化ではなくして、音の性質の變化である。同時に聽かれる協音の音の多様性と一目に把握せられる色と形との多様性とは到底競争することはできない。音樂的のものゝ外に、雷鳴、爆音等の如きもの亦、特有なる時間的形態性をなす。

語の少いのに比べて、他の感覺域に於ける時間的形態性の種類亦極めて夥しい。

更に内部知覺の範圍に入りても、快、苦、期待の増進、消滅の如き變化は、それが内的表象作用の對象をなすときには、獨特の時間的形態性を保

つこと、なほ、音の去來と同様である。この種の形態性は、多くは詩的作品の美的効果の基礎をなす。

變化の外、なほ留保、持續も特有なる時間的形態性をなすことがある。

一一

進みて、關係や矛盾をも一種の時間的形態性に歸し、次に高次の形態性に論及してゐる。

多數の音が比較活動なしに旋律をなすと同じく多數の旋律が、或は複音楽にみる如く、同時に或は連續的に、或は旋律が視運動と結合して高次の形態性をなすであらうか。これを決定すべき確かな手段はないのであるが、物、心兩界の表象を統一的概念に結合する例は多い。人間の行爲をあらはす一般的概念、更にはその特殊相を表

はす名詞、動詞、進みては、あらゆる種類の個人階級の名稱、大多數の人間の團體や組織の名稱、地名、動物の名は、いづれも物心兩方面の結合を志し、かくて日常生活に用ゐられる概念の過半はこの範疇に屬すると思はれる。これ等の各には、單なる表象群が對應するのみであつて、表象の全てを含む統一なる紐帶なしとして、かくの如きことは可能であらうか。これ高次の形態性の存在を指示する所以である。

一二

形態性論は、その第三部に於て、心的生活上に於けるその意義を説く。

日常生活や科學で用ゐられる語の大部分が、それを表はすといふことだけでもその心的生活上に於ける大切な意義が察せられるのであるが、假

りに、前節の終りに述べた物心兩方面を含む高次の形態性の存在を拒み、ねがひ、訴へ等の概念をば、統一的ならざる、種々なる表象の單なる聯合的連鎖にすぎずと解しても、なほ、これ等の要素中には形態性の存することは拒まれぬ。變化や留保の概念は、時間的形態性よりの抽象によりてはじめて得られ、その特殊相をなす動詞は、殆ど皆或る種類の形態性を示し、同様にして、名詞、形容詞も一つの表象以上のものに關係する限り、悉く又これに屬する。

更に形態性は、先にも例示したやうに、要素に比べて、はるかに確實に記憶され、聯合作用も多くは又この上に行はれ、特に類似聯合の法則とは特別の關係にある。想像活動にありては、形態性は格段なる地位を占め、要素的なる表象に比してはるかに廣く、且自由なる活動の範圍を保つ。さはいへ、新なる形態性の發見が殆ど遊戯的に何等

の抵抗なしに行はれるのではなく、寧ろ、舊套を脱して、眞に斬新、特有なるものを生まむがためには、少なからざる努力を必要とする。

形態性は、その基礎と共に、何等の特殊の補助活動なしに、興へられるといふ。しからば、場合によりて經驗する努力は何であるか。例を繪畫にとる。感覺によりて興へられるものは、畫家がそれによりて傳へむとする視覺表象にあらずして、その上にこの表象が想像活動によりてはじめてつくらるべき貧弱なる骨組にすぎぬ。畫面上の光と色とのわづかな差別と、遠近法的なる省略とを用ひて、聯想記號となしこれによりて第三次元と、全ての光を表象するためには、相當の努力を要する。加之、大なる繪にありては、つねに全畫面を見廻して、かくてよみどり得たる細部を錯覺によりて全體の間接視の部分に保つ必要がある。これを仕遂げてはじめて、繪が興ふる形態性の基礎たる表

象群を意識することが出来る。これをなし得るものにして、はじめ、美的満足に達することが出来る。かく考へ來れば、これに由りて一方では、美的判断の相違を簡單に説明する根據を得、他方面の問題については、かくて形態性の基礎を意識に上したものは、更に補ふに、特別の作用を要せずして、これと同時に形態性にいたることを知る。彫刻その他でも又同様のことが考へられる。

次に見掛け上、同一の表象群が、種々なる形態性の基礎をなすと看做される場合がある。例へば視野に與へられたる黒地に白の四角形が、或はこの四角形が一つの對角線で二つの三角形に分たれ或は二つの對角線で四つの三角形に分たれ或はこの各々の三角形中にも、又周囲の黒地の上のいづこにも、任意の圖形を描くとも考へられる。併しこれは、同一の強度、同一の間隔を保つ拍節の系

列がそれ／＼第三、第四又は第六拍節を他よりつよく表象するに從て、任意に三、四又は六節のリズムとして把握せられると同様に、想像力が、同一なる外部感覺刺激に對して、その基礎を變化し從て又間接には、形態性をも變化するに基くものであつて、いかなる場合にも、同一の基礎には同一の形態性が結びつくものである。

一三

この學説は、又、種々なる感覺域、乃至は一般に表象せらるべきものゝ種々なる範疇の間の罅隙を充たし、外見上、無縁なる現象を一體系中に收め得るにいたらしめる可能性を持つ。

ジョン、スチュアート、ミル (John Stuart Mill) はその歸納論理學に於て自然の解釋に於ける統一的努力は互に還原を許すことなき心的性質の多様

性のために制限せられることを示した。自然科学の理想が達せられて、物的現象は全て原子の力學に歸せしめられても、更に又心界をも含む完全なる自然解釋を必要とする。

一々の心的現象に對應するものとしての自然法則が立てられても、その上には不可還原的なる心的範疇が存するために、これ等の自然法則の間には、一より他を誘導する關係は許されぬ。結局すくなくとも心的性質と同數だけの究竟的なる自然法則を持つこととなる。この際に於て、たとへ可能性だけでも、これ等、見掛け上、不可約的なものをば共通の基礎より導き得むことは、價值あることであらう。

例を音表象にとる。音表象は全て、簡單なる音でない限りは、噪音も共に、これ等の簡單音の意識内に於ける結合に由りて生ずることは何人も疑

はぬところである。音樂的なる音結合が非音樂的なる噪音と異なるところは、前者にありては印象が或る程度まで分析されるに對して、後者はそれが不可能なる點にある。併しこの不可能性は決して絶對的ではない。不熟練なる耳には協音も樂音ときかれ、熟練せるものは、樂音中にも、分音をわかち、依て協音としてこれを聴く。故に、何人も注意の活動によりては、噪音をその成分にわかち得るにいたるべしとも思はれ、爆音の如き簡單なるものも、實際は種々なる要素より成立すとせば今日なほ分析せらるゝにはいたらざる所謂、簡單音も亦要素の結合よりなるといはれないであらうか。一層原本的なる要素の總和が、その形態性を保つものとは看做されないであらうか。果して然りとすれば、色、匂ひ、味ひ等すべての表象せられ得べき範疇にも、同様のことを認むべきである。かくして終には一つの原本的性質に、さなく

とも、尠くとも、一つの性質的連續に到達し、これよりして、その種々なる結合と、それ〴〵の形態性によりて例へば色と音との如き種々なる内容をつくることを得るのではないか。風琴の音と銃聲とを比べて、共に比較的に簡單に同種の要素の融合として表はされ得ることを思へば、未知の原本的要素の極めて高度の複合によりて、音と色とがあらはれると考へても、もはや不思議ではあるまい。

一四

上述の思想は、いかに不思議なものであらうが、たとへ、何人も、その實現を期待するほどに大膽ならずとしても、とにかくこゝにいふ還原の可能性を拒むべき確かなる根據はないのである。その結果は、組織的なる認識衝動の満足でもあらう。實在についての吾人の知識は、表象し得るも

の以上に出でざるべきが故に、共通なる原本的要素よりして、あらゆる表象内容を誘導し得れば、既知の全世界を一つの數學式に委すべき可能性を示すであらう。

この統一的の努力こそは個別化的の傾向への均衡である。心的要素の結合と共につねに新なるものゝ生ることを確信するものは、これを永久に復歸すべき成分の推移にすぎずとなすものに比しては、この努力に偉大なる意義を認めるであらう。

心的結合はそのまゝ完全に反復することはない故に無数の統一的意識の各に於ける各の時は、それ〴〵に特有なる性質を備へ、その個性を具して過去の懷に沈みては、復歸することなく、模倣を許さず、これに代るものは、常に新なる現在の創造である。(大正十年二月十五日)